

ふるさと御所 文化財探訪

其の七

弥生時代 〈2〉

環濠集落と

弥生人の住まい

生涯学習課文化財係
☎内線696

中国では、殷（紀元前1400年ごろ）の時代から、牛・馬・犬など家畜の首に青銅製の鈴が付けられていました。この鈴の内部には舌と呼ばれる小さな棒が吊り下げられ、揺られて鈴の内面に舌が当たる度、カランカランという軽やかな金属音を発したのです。朝鮮半島ではこの銅鈴は稀少であったため個人の持ち物となり、また、これがやや大きく作られるようになって、高さ15cm程度までの小形の銅鐸としても墓に副葬されるようになりました。ほどなく日本列島にもたらされた青銅製の武器（銅剣・銅矛・銅戈）も九州地方に根付いて大形化、扁平化が進み、実用の武器からはほど遠い祭器とな

りますが、銅鐸もまた日本列島内（近畿地方とその周縁地域）で製作されるようになるやうになると大形化が進みます。御所市名柄出土の銅鐸（写真1・2）は、比較的古式の巨大化が進む以前のものです。高さは25cmほど、鈕（吊り手部分）には吊り下げたことによる損傷がみられ、表面は長期の使用により摩耗して文様も分かりにくくなっています。名柄銅鐸は内面に下げられた舌により当時実際に打ち鳴らされたものですが、続く世代の銅鐸は次第に巨大化が進むのに反してその鈕は薄く扁平になり、 unnecessary 裝飾がにぎやかとなつて、もはや銅鐸本体を吊り下げするための強度を持たなくなり「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」へと銅鐸は変化するというわけです。ちなみに「見る銅鐸」の最大のもは総高130cmを超える巨大なものとなっています。「聞く銅鐸」は近畿地方を中心に分布し、周縁に行くに従って「見る銅鐸」の比率が増えてゆきます。これは銅鐸の祭りの始まったのが早いか遅いかを示すものと考えられています。また、銅鐸は日本列島ではムラ全体が管理するものとなつて、常時はムラの境界あたりに布に包まれるなどして大切に埋められ、毎年収穫の祭りの際に掘り出されて用いられたものと考えられています。銅鐸の祭りは弥生時代を通じて行われ

ましたが、古墳時代に入る直前に一斉にその使用が中止されます。つまり銅鐸の祭りは古墳時代の施政者にとって忌むべきものだった、ということになります。したがって名柄銅鐸の場合は紀元前2世紀ごろに作られ、以降、五百年以上にわたって用い続けられたこととなります。さて、名柄銅鐸は大変珍しい銅鐸として著名です。一つは片面（A面）の文様が流水文（櫛状工具による曲

水文様）であるのに対して、もう片面（B面）の文様が横帯文（細線の格子で埋められた幅広の横方向直線帯を主とした文様）となつており、A・B面の文様原理を違えること、もう一つは多鈕細文鏡と呼ばれる朝鮮半島製の青銅鏡（写真3）と一緒に埋められていた（地下約70cm）ことです。変わった顔をした、他とは少し異なる使われ方をした銅鐸、と言えるかもしれません。



写真2 名柄銅鐸B面（同）
東京国立博物館蔵（重要文化財）



写真1 名柄銅鐸A面（総高22・7cm）
東京国立博物館蔵（重要文化財）



写真3 名柄出土の多鈕細文鏡
（直径15・6cm）
東京国立博物館蔵（重要文化財）



写真4 鴨都波遺跡12次調査出土銅鐸形ミニチュア土製品
（残存高4.7cm）
（名柄銅鐸B面と同様、横帯文を表現する）

※写真1～3は、いずれも東京国立博物館から貸し出し許可済み。
Image:TNM Image Archives Source:http://TnmArchives.jp/